

室内空気質に起因すると考えられる自覚症状と暮らし方に関する調査 およびホルムアルデヒド濃度の実測調査 -新築学生寮を対象として-

○東実千代*、新谷恵**、八木成江*³、守屋好文*⁴、疋田洋子*

(*奈良女子大、**岡山市役所、*³ベネッセコーポレーション(株)、*⁴松下電器産業(株))

【目的】室内空気質に起因すると考えられる健康障害が社会問題となっている。本研究は建材・施工剤から揮発するホルムアルデヒド（以下 HCHO）に着目し、居住者の自覚症状と暮らし方の関係、さらに室内濃度との関係を検討することを目的とする。

【方法】1996年と1997年に竣工した奈良女子大学学生寮を対象とした。アンケート調査は1997年6月と1999年6月に行った。両調査の合計回収率は82.7%で、有効票は311であった。調査項目は、入居時期、居室位置、部屋の換気状況、入居後の自覚症状等である。HCHO濃度の測定は1998年春、夏、秋季、1999年夏、秋季、2000年冬季に行った。測定は検知管法とし、室内を5時間閉め切った後、室内空気を0.3L/minで3L採取した。その他換気回数、室温、内装材表面温度、湿度の測定を行った。

【結果】入居後に何らかの自覚症状を感じた人は全体の約半数を占めていた。最も多かった申告は「異臭・刺激臭を感じる」で、竣工直後に入居した人の申告率が高かった。さらに、居住者の換気頻度によっても申告の割合に差がみられた。室内のHCHO濃度は全ての測定時期において、厚生省指針値 $0.1\text{mg}/\text{m}^3$ （25℃換算で0.08ppm）を越えていた。